

二〇一五年度

二月四日入試

国語 (50分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答题紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、3-1 から 3-13 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

① 澄田千穂は恐れてはいなかった。からだのふるえも止まっていた。ただ胸の鼓動が百メートルも走ったあとのように高鳴っていた。

千穂は腰をおとして右手を背後に出し、斜の姿勢で選手たちの姿を見た。五人の選手が最後のコーナーにかかっていた。② 千穂は、紫色のはち巻を目でさがした。紫色のはち巻をしているB組の岩井まささをさがしたのだった。五人は一団となってコーナーでもつれ、どこに岩井まさがいるのか、はっきりしなかった。

※ 応援の声はかちどきの声のように高く、もはやA組もB組も、C組もD組もF組もなかった。秋季運動会のクライマックス(最高潮)であった。

点数表示板に各組の点数が書きこまれていた。五組が接近した点数であった。この女子リレーを最後として優勝がきまるのである。B組の合計点数は三十八点である。このリレーで一番になれば、五点を加えて四十三点となり、B組の優勝は確実であったが、二等以下では、優勝はおぼつかなかった。そういう総決算の最後のひとりに、澄田千穂は選ばれて、スタートラインに立っているのであった。

コーナーでもつれた一団は、やがて向きを変えて最後の継走者にバトンをわたすために力走を試みている。一番は赤いはち巻をしているA組、二番は白いはち巻のD組の生徒で、ふたりはせり合っていた。ふたりに二メートルおかれて、B組の岩井まさか歯を食いしばって、ふたりを追っていた。

赤いはち巻が澄田千穂のそばを走り過ぎた。みごとなタッチ。続いて白いはち巻がタッチ。澄田千穂はスタートしていた。背後を見なかった。ひろげた手にわたされるバトンの感覚を待ちながら、数歩走った。ぴたりと彼女の手にバトンがわたった。ひどく冷たい感じだった。B組五十名の運命をになっているように重い感じだった。

③ 「澄田さん、お願い・・・。」  
※ 怒濤のような声の中に、千穂は荒木雪子の声を聞いた。雪子が千穂に期待しているものは、ほかの学友と

はちがっていた。運動会の最後をかざる女子継走競技のラストを、雪子が走るようになっていたのが、午前ちゅうの百メートル競走のとき、足の筋に痛みを感じだし、そのために予定が変更されて、三番を走るはずだった千穂が、ラストを走るようになったのだった。

④ 「とても、わたしにはラストはむりだわ。」  
彼女は、ラストをほかのひとにかわってもらえまいかと、寺島先生に申し出たが、寺島先生はゆるさなかった。

「思いつきりつつ走れ、それでいいんだ。」

千穂は、寺島先生がそれでいいんだということばのうらに、荒木雪子が走れなくなったのだから、最後の努力をして、負けてもそれでいいのだ、といっているように思っていた。だが、競技のプログラムが進行して、この最後の一戦によって、B組が優勝するかしないかの分かれめに立たされたとなると、クラス全体が彼女に求めるものはちがっていた。

(勝つのだ。B組のために一等になるのだ。)

みんなはそれを要求していた。声援の中に、千穂はB組全体のその要求を聞いた。だが、荒木雪子の、澄田さんお願い、という声は、別のものに聞こえた。雪子は彼女の足の事故のために、重責が千穂にかかったことをわびているのだ。わびながら、いっしょうけんめい走ってくれ、と願っているのだと思われた。

千穂は目の前の白はち巻を追った。相手がD組のだれであるか、そんなことはどうでもよかった。白はち巻が、自分よりうしろになればそれでよいのだ、と考えていた。

第一コーナーまでメートルにつまっていた。前を走っている、白はち巻のからだは円の内側にかたまっていた。むずかしいコーナーテクニク（まがりかどを走る技術）にはいったのだ。白はち巻の生徒は、長身で足が長かった。それに比較すると、澄田千穂のほうは小柄で足幅がせまかった。コーナーの処理は、千穂のほうで条件がよかった。彼女は、小きさみで速度を落さずにコーナーを処理していった。ふたりが円の中心線に対してならんだ。

⑤ 喚声（かんせい）がわいた。千穂はその喚声（かんせい）が、自分が白はち巻を、コーナーで追いつめたことに対するB組の歓声（かんせい）だと思った。コーナーの最大角度の点で、千穂の内側にかたむいたからだは、白はち巻の前に出た。一步、二歩、彼女は白はち巻の前に出て、直線コースにかかった。前には赤はち巻が走っていた。

「澄田さん、がんばれ、澄田さん、澄田さん。」

澄田千穂は、まっかな顔をしてからだをのり出して叫んでいる日野敏男の顔を見た。瞬間だったが、日野が全身の力をこめて、彼女を応援してくれている姿を見た。朝から、B組のために点数をかせいできた日野敏男にとっては、この勝負は負けられないものであった。日野敏男の気持ちは、千穂には十分理解できていた。B組のためよりも、日野敏男のために勝たなければならぬ一瞬（いつしゆん）だと思った。

⑥ 日野を意識した瞬間から、澄田千穂の足はふしぎにのびた。赤はち巻との間隔（かんかく）が、徐々にあるがちぢまっていくのが感じられた。赤はち巻の増山宮子は、三年の全学級を通じて女子ではいちばんのスプリンター（足の速い人）だった。宮子に勝負をいどむことのできる者があるとすれば、荒木雪子（あらかきゆきこ）だけが、雪子にしても、勝つことより、負ける可能性が強かった。その増山宮子を前にして、間隔をつめていく澄田千穂の力走は、異常なものに見えた。赤が勝つにきまっていると思いきんでいた事実を、目の前でひっくりかえそうとする澄田千穂の姿が、飛塚中学校（とびつかちゅうがっこう）全体を、興奮（きんぷん）のるつぼの中に追いこんだ。

もはや、競技はクラス対抗（たいこう）の試合ではなくなっていた。紫（むらさき）のはち巻をしめ、唇（くちびる）をきつとかみしめて走っている白い顔の澄田千穂が、足の長い、目のくるくるした、顔の黒い増山宮子を、抜（ぬ）かか抜かないかの興味にかかっていた。⑧ 全生徒とその家族たちは、できかかっている奇跡（きせき）について、目を見はついていた。

⑨ 赤はち巻の増山宮子は、すさまじい喚声（かんせい）を彼女のためのものとして聞いていた。彼女は全観衆（かんしゆ）があげる声を、彼女のすばらしい走りぶりを、彼女の健康美（けんこうび）をたたえる賞賛（しょうさん）と感（かん）じて走っていた。いつもそうであったから、きょうもそうであるべきだと、彼女の経験（けいけん）が判断（はんぱん）していて、背後（せきご）にせまりつつある澄田千穂のことなど、念頭（ねんとう）においていなかった。あの、いつも悲（かな）しそうな顔をして、なにか考えこんでいる澄田千穂が、それほど走れるなどは夢想（むそう）だにできなかった。十メートルもおくれて、よたよた走っているのだと思っていた。

⑩ 第二コーナーにかかった。千穂は軽快（けいがい）なテンポで、コーナーを処理（しり）していった。宮子のあとについていた千穂が、彼女の右側（みぎがわ）に出たときに、はじめて宮子は意外（いがい）な競争者（けいそうしや）があらわれたことを知った。宮子の驚（おどろ）きは、彼女の足の乱調（らんてう）となってあらわれた。コーナーで足幅（あしはば）を広くとつてはいけない原則（げんそく）を、千穂を右側（みぎがわ）に感じたときに破（やぶ）った。上体（かみ）を左傾（さひか）していた彼女の姿勢（しせい）にむりができ、速度（そくど）がおちた。

ひょいっと、澄田千穂が宮子の前にまわりこんだ。⑪ 競争（けいそう）の位置（いち）は逆転（ぎやくてん）した。赤はち巻の宮子はさらにあわてた。ふたりは、いちばん内側（うちがわ）のコースを走っているのだから、宮子が千穂を追いこして先頭（せんとう）に立つためには、彼女を突きとばすか、反則（はんそく）を犯（おか）して、グラウンドの内部（うちぶ）にふみこむか、千穂の外側（そとがわ）に出るしかなかった。突きとばすことも反則（はんそく）もできないから、宮子はしばらく千穂（ちほ）に追従（おっせい）した。まもなく直線（ちくせん）のコースになれば、こつちのものだ、宮子はそう考えた。事実（じじつ）、そうであったならば、千穂は負けたにちがいないが、そのころ

になって、宮子を応援するA組の一団が金切声を出して、宮子にがんばれと叫び、しっかりと声援した。宮子にはそれも意外であった。自分が出れば勝つことは当然のこととして、任せきった安易さで応援していたクラスの声が、にわかには彼女に奮起をうながしたときに、彼女は自信をぐらつかせ、いささかあわてた。

⑫ 彼女はコーナーで澄田千穂を抜こうとあせった。そのために千穂との差は決定的なものとなった。

ふたりは直線コースをゴールをめざして走りこんでいった。千穂は追われる人であり、宮子が追う側に立っていた。宮子は少しずつ千穂との間隔をつめていった。

⑬ 澄田千穂はなにも考えなかった。頭の中に血のように赤い物があつて、爆発しそうにひろがっていた。目の前のがかすんでいった。一条の白い線、それは、決勝点に待っている白いテープであつたが、それだけが彼女の目を横断していた。

勝ったとも、負けたともわからなかった。千穂は自分の胸から離れない白いテープをひきながら、さらに走った。

「澄田さん、ありがとう。」

荒木雪子に固く抱きしめられて動けなくなってからも、自分のあげた結果について、まだはっきりは知っていなかった。荒木雪子につきそわれて、B組代表として賞品を第一番めに受けとったとき、はじめて、勝ったのだ、と思つた。

(新田次郎「風の中の瞳」より)

※(注) かちどきの声——勝ったときにあげるよろこびの声。

怒濤——あれくるう海の大波。

問一——線 a 「夢想」、b 「追従」の読みをひらがなで答えなさい。

問二——線①「澄田千穂は恐れてはいなかった。からだのふるえも止まっていた。ただ胸の鼓動が百メートルも走ったあとのように高鳴っていた。」とありますが、このとき澄田千穂はどのような状況に立たされていましたか。解答らんの「状況」につながるように十五字以上二十字以内で答えなさい。

問三——線②「千穂は、紫色のはち巻を目でさがした。紫色のはち巻をしているB組の岩井まささをさがしたのだった。五人は一団となってコーナーでもつれ、どこに岩井まさがいるのか、はっきりしなかった。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 この後、B組の岩井まさの姿を確認した時、岩井まさは何等で走っていましたか。漢数字で答えなさい。

2 まさの力走が最もよくわかる表現を文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問四 —— 線③「澄田<sup>すみだ</sup>さん、お願い・・・。」という言葉にこめられた荒木雪子<sup>あらかきゆきこ</sup>の気持ちとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 負傷した自分を迷惑に思いながらも走ってくれる千穂<sup>ちほ</sup>に対して、くれぐれも無理をしないで走ってほしいと願う気持ち。

イ 負傷した自分のかわりに走ってくれる千穂に対して、重い責任を負わせたことを謝罪しつつも勝ってほしいと願う気持ち。

ウ 負傷した自分をかばって走ってくれることになった千穂に対して、ありがたいと感謝しながら勝ってほしいと思う気持ち。

エ 負傷した自分をさしおいて走ろうとする千穂に対して、驚<sup>おどろ</sup>くと同時に人間として絶対に許せないというにくしみの気持ち。

問五 —— 線④「とても、わたしにはラストはむりだわ。」とありますが、この時の澄田千穂の心はどのような状態だったと考えられますか。解答らんの「状態」につながるように五字以内で答えなさい。

問六 —— 線⑤「喚声<sup>かんせい</sup>がわいた。」とありますが、なぜですか。その理由を解答らんの「千穂が」～「から」にあてはまるように文中から十五字以上二十字以内でぬき出して答えなさい。

問七 —— 線⑥「日野<sup>ひの</sup>を意識した瞬間<sup>しゅんかん</sup>から、澄田千穂の足はふしぎにのびた。」とありますが、なぜ「日野を意識した瞬間」から、「澄田千穂の足はふしぎにのびた」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 日頃<sup>ひごろ</sup>からライバルである日野が、千穂を応援<sup>おうえん</sup>している姿を見て、絶対に勝って日野を見返してやろうと思ったから。

イ 自分に好意をいだいていることをかくしてきた日野が、なりふりかまわず応援する姿を見て力がわいてきたから。

ウ クラスのために勝ちぬいてきた日野が自分のために応援してくれる姿に気づき、日野のためにも負けられないと思ったから。

エ いつもクラスの中心的存在として活躍<sup>かつやく</sup>する日野に、自分ががんばっている姿を認めてもらいたかったから。

問八 —— 線⑦「興奮<sup>こんげん</sup>のつぼ」とは、そこにいる人々の気持ちがどのような状態になっていることを示していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ひどく冷ややかな状態。

イ ひどく落ち着かない状態。

ウ ひどく混乱している状態。

エ ひどく高ぶっている状態。

問九 —— 線⑧ 「全生徒とその家族たちは、できかかっている奇跡きせきについて、目を見はっていた。」とありますが、ここでいう「奇跡」とは、どのようなことですか。解答らんの「こと」につながるように、文中の言葉を用いて十五字以内で答えなさい。

問十 —— 線⑨ 「赤はち巻の増山宮子まみやまみやこ」とありますが、文中から読みとれる「増山宮子」の性格としてあてはまらないものを次のア～カの中からすべて選び、その記号を答えなさい。

- ア 自信にあふれている。
- イ ものごとを悲観的に考える。
- ウ 自尊心が強い。
- エ 負けずぎらいである。
- オ ひっこみ思案なところがある。
- カ 傷つきやすい。

問十一 —— 線⑩ 「宮子のあとについていた千穂ちほが、彼女の右側に出たときに、はじめて宮子は意外な競争者があらわれたことを知った。」とありますが、宮子は千穂をどのように思っていましたか。文中から一文でぬき出し、その初めの五字を答えなさい。

問十二 —— 線⑪ 「競争の位置は逆転した。」とありますが、「位置」が「逆転した」のは、何が原因となったからですか。原因となった事がらが具体的に書かれているひと続きの二文を文中からぬき出し、その最初の六字を答えなさい。

問十三 —— 線⑫ 「彼女はコーナーで澄田千穂すみだちほを抜ぬこうとあせった。」とありますが、「彼女」が「あせった」直接的な理由をまとめた次の文中のA・Bにあてはまる適当な言葉を考えて答えなさい。

普段は、彼女が走れば当然 A ものと思っていたA組のクラスの生徒たちが、B で彼女を応援して奮起をうながしたから。

問十四 ――線⑬「澄田千穂はなにも考えなかった。頭の中に血のように赤い物があって、爆発しそうにひろがっていた。」とありますが、この部分の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 一心不乱にゴールに向かう千穂の息も絶え絶えの様子を擬人法を用いることによって、印象的に表現している。
- イ 何にもとらわれずにゴールを目指す千穂の心境と身体が限界を越えた様子を、比喩を用いて効果的に表現している。
- ウ ゴール直前の神々しい瞬間を、ゴールの白色と頭の中の血の赤色との対照において色彩感豊かに表現している。
- エ 意識が遠のきながら走る千穂に無限のエネルギーがふつふつとわいてくる様子をたとえを用いて表現している。

問十五 全体を通して、澄田千穂の人物像として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア おとなしそうに見えるが、内にはねばり強さと闘志を秘めた人物。
- イ 一見ひ弱だが、策略によって他を圧倒する知力をそなえた人物。
- ウ 無感情に見えるが、喜怒哀楽を素直に表現できる感情豊かな人物。
- エ 明朗快活で人望が厚く、いざという時に頼りになるリーダー的人物。

問十六 この文章の内容として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 澄田千穂、荒木雪子、増山宮子の三者三様の生き方を描き出し、読者に青春の真の意味を問いかけている。
- イ クラスメートの声援にこたえて走る澄田千穂の姿を通して、人間の持つ力の無限の可能性を描き出している。
- ウ 栄光と挫折という二つの対極的なテーマを通して、陸上競技界や人生の厳しさを暗喩的に表現している。
- エ 今この一瞬に全力投球する女子生徒の姿を、彼女をやさしく見守る教師の目を通して感動的に描いている。

## 二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

「無理して自分を抑えなくていいんだよ。」

①「そのままの自分を出せばいいんだよ。」

そんな一見やさしげなフレーズが世の中に氾濫はんらんしている。無理して自分を抑えることはない。そのままの自分を出せばいい。これは、無理をして自分を抑えすぎたせいで心を病みや、日常生活に支障きたを来すほどに疲れ切ってしまった人に向けたメッセージに他ほかならない。ふつうはそのままストレートに自分をぶつけることなどしない。自分を抑えるのは社会生活を送る上で必要不可欠のことだ。

ところが最近aは、日本人らしい抑制よくせいに対してヒハンのなムードが漂ただよっているように思われる。

たとえば、タテマエを軽視する風潮である。②ホンネとタテマエの二重構造が日本人のいやらしいところだと言われたりする。たしかにその二重構造にいやらしさがあることも否定できない。でも、その二重構造がクッションになつて衝突しょうとつの少ない社会、人を傷つけることの少ない平和な社会が保たれてきたといった側面があることを見逃みのがしてはならない。

つい先日、買い物に出かけたとき、店頭で客がムキになって店員に文句を言っている場面に出くわした。店員がレジに戻もどってくれないと買うことができないため、しばらく傍かたわらで聞いていたのだが、どうみても客の理解が悪いようで、とくに商品に問題があるわけではないようだった。それでも店員は低姿勢で「すみません。」を繰り返しながら、商品の使い方を丁寧ていねいに説明していた。

もし、この店員が、Aでは、

「理解の悪いお客さんだなあ。説明書の通りにやればいいんだけど。読んでもわからないんだから、しようがないなあ。」

と思っおっているからといって、それをストレートに口にしてしまったらどうだろう。客は怒り出すだろうし、そんな態度を取っていたら店の評判を落とすのは間違まちがいない。

③ホンネでは自分が悪いと思っおっていなくても、私たち日本人はしばしば謝あやまる。タテマエで謝るのはよくない、ホンネで対応すべきだ——もしそのような考えが広まったら、はたして世の中は過おごしやすくなるだろうか。どうもそうは思えない。

人間というのは、だれでも自己中心的なものの見方をするものだ。トラブルになるようなときは、双方そうほうとも自分が悪いなどとは思っおっていない。そんなホンネを遠慮えんりよなくぶつけ合あったら收拾しゅうじゅうがつかなくなるし、傷つく人が出るだろう。繊細せんさいな人や気の弱い人は、人とかかわるのが怖こわくなり、引きこもってしまうかもしれない。

Bを抑えて C で謝るとき、その背後には、自分が折れることで事態を無難に收拾しようといった心理や、相手の気持ちをこれ以上傷つけないといった思いやりが働はたらいていたりする。これはいかにも日本的なコミュニケーションと言える。私たち日本人の感覚からすれば、

「自分は悪くない。なぜなら……。」

と、あくまでも譲ゆずらずに自分の正当性を主張しようとするのは、何とも見苦しいし、大人げない態度と言わざるをえない。

④グローバル化の時代に対応するには、日本人ももっと自己主張できるようにすべきだ。ハッキリものを言



えない日本人のままでは、国際的に理解されないし、交渉に負けてしまう——そんな論調が強まっている。<sup>※</sup>

そうした時代の空気のもと、学校教育でも自己主張できる人間を育てることが重視され、企業研修でも<sup>※</sup>ディベートやラロジカルシンキングやらが積極的に取り入れられるようになった。

自分の意見をハッキリ言えないようではグローバル化の時代を生き抜くことはできない。海外の人たちのように堂々と自己主張できなければ後れを取ってしまう。そんな風に言われる。

たしかにグローバルな立場で海外の人たちと交渉するには、遠慮のない強烈な自己主張が必要だろう。ただし、ほとんどの人は国内で日本人を相手に暮らすのではないか。同じ日本人を相手に強烈な自己主張するように推奨するのが、はたして望ましいことなのだろうか。

⑤ さらに言えば、グローバル化というのは、外国のやり方にこちらが一方的に合わせることを指すのだろうか。相手に合わせるのは日本人の得意技だ。伝統的に幼児期からそのように人格形成が行われている。それによって穏やかで争いごとの少ない社会が維持されてきたのだ。その日本的なコミュニケーションの方法を海外に発信していくことも大切なのではないか。

向こうのやり方をただ取り入れるだけでなく、こちらのやり方を向こうに理解してもらえようように発信する。それもグローバル化の時代に必要不可欠なはずだ。

自分の思うことをハッキリ言わないと相手に伝わらない。遠慮して相手が察してくれるのを期待するのは甘えている。海外の人たちはハッキリと言葉で自己主張するし、感情表現も豊かだ。日本人も思うことはハッキリ言葉にし、要求があれば相手にわかるように主張することが必要だ。そうしなければ相手に伝わらない。自分の気持ちを隠したりせず率直に表現すべきだ。そうでないと相手にはわからない。たしかにそうかもしれない。

しかし、遠慮や察し合い、譲り合い、相手を立てる、相手を思いやる、言い訳をしない、感情を抑制するといった日本的コミュニケーションの奥ゆかしさも忘れてはならない。<sup>⑥</sup>

このところ自己主張が推奨されるようになり、自己主張を促す教育が広まることで、はたして日本の社会にどのような変化が出てきたか。人と人の相互理解が深まったと言えるだろうか。決してそんなことはないだろう。

むしろ、自分勝手な自己主張がぶつかり合うばかりで、殺伐としてきた観がある。他人の気持ちや立場を配慮して自己主張を抑えるということがなくなれば、お互いの主張がぶつかり合うようになるのは当然のことだ。<sup>⑦</sup>

ハッキリ自己主張することでお互いにわかり合える。それは幻想にすぎない。<sup>⑧</sup> 自分の思いや要求をストレートに話したところで、相手に理解してもらえらるとはかぎらない。感受性や価値観、立場が異なれば、ものごとを見る構図が違ってくるため、いくらハッキリ伝えたところで、わかり合えるわけではない。むしろ、お互いの自己主張がぶつかり合って、激しい争いになりがちだ。

自己主張する人間を人格形成の理想とするアメリカ社会が訴訟社会になっていることが、まさにそのことを証明している。お互いに強烈に自己主張をしていくと、法的に決着をつけなければならぬほど、あらゆることがらが紛糾してしまうのだ。<sup>⑨</sup>

⑨ 日本のコミュニケーションは、そのような自己主張のぶつかり合いによる紛糾を防ぐ機能を果たしてきていた。自己主張にこだわることを見苦しく感じ、それによる対立を虚しく思う日本人の感受性が、あえて自己主張を抑制するコミュニケーションを発達させてきたのである。

(榎本博明「ディベートが苦手、だから日本人はすごい」より)

※(注) 論調

意見の傾向。

————— デイベート ————— 賛成派と反対派の二つに分かれて議論をかわすこと。

————— ロジカルシンキング ————— 筋道の通った思考をすること。

————— 殺伐<sup>さつぱつ</sup> ————— あたたかみがなく、あらあらしい様子。

問一 〓線 a 「ヒハン」を漢字に直しなさい。

問二 〓線① 「そんな一見やさしげなフレーズが世の中に氾濫<sup>はんらん</sup>している。」とありますが、筆者はこのよ  
うな状況<sup>じじょうきょう</sup>に対してどのように考えていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その  
記号を答えなさい。

ア 思いやりの言葉をかけることは人を甘やかすことになってしまい、相手のためにならないことな  
ので日常生活では抑えるべきだと考えている。

イ 現代の日本人は人に気をつかいすぎて心を病んでしまっており、今後はよりいっそうのやさしさ  
が求められることになるだろうと考えている。

ウ 自分を抑えすぎて疲れ切ってしまった人にとっては必要であっても、ふつうの人が日常生活を送  
る上では自分を抑えていかななくてはならないと考えている。

エ タテマエであっても相手を思いやることが日本人の感性であり、ホンネを抑えてでもやさしげな  
声をかけることは必要不可欠であると考えている。

問三 〓線② 「ホンネとタテマエの二重構造が日本人のいやらしいところだと言われたりする。」につい  
て次の1～3の問いに答えなさい。

1 「ホンネとタテマエの二重構造」とは何のことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一  
つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 周りの人の意見やその時の気分により、考えや気持ちを変えてしまうどっちつかずな性格のこと。
- イ 自分の本当の感情や考えを出さず、本心とは異なった表向きの対応をする裏表のある態度のこと。
- ウ 親しい人に対してはやさしくするのに、親しくない人には意地悪をする二面性のある人格のこと。
- エ 自分の立場が不利にならないようにするために、つぎつぎとそれを積み重ねていく姿勢のこと。

2 「ホンネとタテマエの二重構造」について文中の内容をもとに考えたときに、その例として適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 妹のはじめて作った料理が自分の口に合わなかったとしても、「おいしくできたね。」と言って残さず食べた。

イ 絵のコンクールに入選したことをほめられたときに、自分でもうまくかけたと思っていたが、「大したことはないです。」と答えた。

ウ 遊びに行った家の人から飲み物をすすめられたときに、本当はのどがかわいていたとしても、「気をつかわないで下さい。」と遠慮をした。

エ スポーツの試合で負けたときに、敗因が自分の実力不足であったとしても、「ルールを説明されていなかった。」と言い訳をした。

3 「ホンネとタテマエの二重構造が日本人のいやらしいところだと言われたりする。」とありますが、「ホンネとタテマエの二重構造」には良い面もあると筆者は考えています。良い面とはどのようなところですか。文中の言葉を使って解答さんの「ところ」につながるように三十字以上三十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問四 文中の  A～Cに入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- |   |   |      |   |      |   |      |
|---|---|------|---|------|---|------|
| ア | A | ホンネ  | B | タテマエ | C | ホンネ  |
| イ | A | タテマエ | B | タテマエ | C | ホンネ  |
| ウ | A | ホンネ  | B | ホンネ  | C | タテマエ |
| エ | A | タテマエ | B | ホンネ  | C | タテマエ |

問五 ——線③「ホンネでは自分が悪いと思っていなくても、私たち日本人はしばしば謝る。」とありますが、日本人がこのような行動をとるのは、どのような思いがあるからですか。その思いを文中から五十字以上五十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの五字を答えなさい。

問六 —— 線④「グローバル化の時代に対応するには、日本人ももっと自己主張できるようにすべきだ。ハッキリものを言えない日本人のままでは、国際的に理解されないし、交渉に負けてしまう——そんな論調が強まっている。」とありますが、このような論調に対して筆者はどのように考えていますか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア グローバル化が進んで海外で暮らすことになっても、日本人である以上は日本人らしく自己主張を抑えていかななくてはならないと考えている。

イ 強烈な自己主張はグローバルな立場で日本人以外の人と交渉する人には必要であっても、日本人同士での生活の場には望ましくないだろうと考えている。

ウ 日本では伝統的に自己主張を見苦しいものとしてきたが、グローバル化が進む現代では自分の意見をハッキリと伝えることが必要になると考えている。

エ 日本人が海外の人たちに後れを取らないようにするために、学校や企業はこれまで以上に強烈な自己主張のできる人間を育てていくべきだと考えている。

問七 —— 線⑤「さらに言えば、グローバル化というのは、外国のやり方にこちらが一方的に合わせることを指すのだろうか。」とありますが、筆者はグローバル化には「外国のやり方にこちらが一方的に合わせる」だけでなく、何が必要だと考えていますか。それを説明した次の文の□に最もよくあてはまる語句を文中から二十五字以上三十文字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

□が必要だと考えている。

問八 —— 線⑥「奥ゆかしさ」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 上品で行いがひかえめな様子。

イ 難しくて気が引けてしまう様子。

ウ すぐにはわからないほど意味が深い様子。

エ 深く隠して気付かれないようにする様子。

問九 —— 線⑦「ハッキリ自己主張することでお互いにわかり合える。それは幻想にすぎない。」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 相手の考えを尊重しないと、怒らせてしまつて話を聞いてもらえないから。

イ 遠慮をすることが根付いた日本では、自分の意見にこだわる人はいやがられるから。

ウ 国によって使われる言葉は異なっており、本心を言葉で伝えることは難しいから。

エ 感じ方や考え方が異なると、ものごとのとらえ方が変わってしまうことがあるから。

問十 ——線⑧「自己主張する人間を人格形成の理想とするアメリカ社会が訴訟社会そしやうになっていることが、まさにそのことを証明している。」とありますが、「そのこと」とはどういうことですか。できるだけ文中の言葉を使って三十字以上三十五字以内で答えなさい。

問十一 ——線⑨「日本的コミュニケーションは、そのような自己主張のぶつかり合いによる紛糾ふんきやうを防ぐ機能を果たしてきた。」について次の1・2の問いに答えなさい。

1 「日本的コミュニケーション」の内容としてあてはまらないものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア あえて自分の感情を抑えるようにする。
- イ 相手の立場を考えて自分の意見を押し付けない。
- ウ 言葉には表さないお互いの本心を察し合う。
- エ 思ったことをがまんせずに相手に伝える。

2 「そのような自己主張のぶつかり合いによる紛糾を防ぐ機能を果たしてきた。」とありますが、どのようにすることで紛糾を防いだのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 異なる意見を持つ人との関わり合いを少なくすることで防いだ。
- イ 意見の違いによる対立そのものを起きにくくすることで防いだ。
- ウ 自分とは違う考えを持っている人に敬意を払うことで防いだ。
- エ 異なる考えも受け入れてより良い意見を生み出すことで防いだ。

問十二 この文章の中で筆者が言いたいことはどういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア これまでの日本では考えの違いによる争いはあまり起きなかったが、このところグローバル化の影響によって意見のぶつかり合いによる争いが激しくなってきたので、新たなコミュニケーションの方法を考えていかなくてはならない。
- イ 海外の人は遠慮のない自己主張によって自分の言いたいことを正確に伝えることができるが、日本人は相手に気をつかい過ぎて自分の意見を隠してしまうことが多いので、ディベート教育によって改善しなくてはならない。

ウ 日本人は外国人のようにハッキリと意見を言えるようになるべきだと言われることが多いが、譲り合いや思いやりの気持ちを大切にすると日本のコミュニケーションによって、争いの少ない社会が続いてきた点を見直さなくてはならない。

エ 日本人は言葉による自己主張が苦手であるかわりに、察し合いや豊かな感情表現といった独自の方法によって理解し合うことができ、海外の強烈な自己主張とは異なったやり方でグローバル化の時代にそのまま対応することができる。

### 三 次の漢字に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 自分の故キヨウをなつかしく思う。
- ② シユウ職試験を受ける。
- ③ 森に小鳥をサガしにでかける。
- ④ 紅茶にサトウをたつぷりと入れる。
- ⑤ 国のケンポウを改正する。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 美しい絹織物を買う。
- ② 養蚕業をいとなむ。
- ③ 子犬が転ぶように出てきた。
- ④ マッチ売りの少女は貧しかった。

問三 次の1・2の漢字の矢印で示した部分は何画目になりますか。漢数字で答えなさい。

1 有  
2 面

問四 次の①～④の漢字の組み立てになっているものを後の語群ア～クの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 上の漢字が主語、下の漢字が述語になっているもの。
- ② 上の漢字が下の漢字を修飾しているもの。
- ③ 似た意味の漢字を組み合わせたもの。
- ④ 意味が反対になる漢字を組み合わせたもの。

【語群】ア 不便      イ 年長      ウ 読書      エ 尊敬  
オ 国連      カ 売買      キ 良心      ク 登山

問五 次の1・2の□にそれぞれあてはまる漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。

1 □ 往 □ 往

2 千差 □ □